２０１３年7月６日

辛坊治郎と高遠菜穂子

本人もまさか自分自身が「自己責任論」でバッシングを受けるとは思っていなかったのではないか。あの事故さえ起きなければ、と思ったに違いない。

ニュース・キャスター（元読売テレビのアナウンサー）の辛坊治郎氏が小型ヨットで太平洋を横断しようとして遭難した。氏は全盲のヨットマン・岩本光弘氏と 6 月 16 日に福島県・小名浜港を出発し、6 日目の 6 月 21 日の朝、宮城県・金華山の南東約 1,200 キロで遭難した。浸水トラブルでヨットを放棄。救命ボートに乗り移った二人はこの日夕、海上自衛隊の救難飛行艇に救助された。

この事件には早速、『週刊文春』と『週刊新潮』が飛びついた。辛坊氏は新潮との独占インタビューで、「税金で助けられることになってしまって申し訳ない」と謝罪し、「9 年前、イラクで人質にされた高遠菜穂子さんたちに対し、自己責任論を持ち出して批判しました。これでは、言ってることとやってることが違うじゃないかと厳しい指摘があるのも承知しています。私には反論できません。」と語った。新潮は「自己責任論」を持ち出し、辛坊氏をバッシングしたのである。

また、ヨットには漏水があったのに不備のまま出航していたことも分かった。氏は「『24 時間テレビ』（読売テレビ）の放送に間に合わせるために出航を急いだのでは？」という疑問については否定した。

新潮は９年前、イラク戦争当時、「人道支援」の活動中に人質になり、その後、救出された高遠菜穂子（注）さんら３人をバッシングした。新潮 4 月 22 日号では「人質報道に隠された本当の話」の記事で３人のプライバシーをあばき、「その家族は『自衛隊は撤退しろ』といい続けた。自己責任という原則を忘れ」と批判、政府にも救出費用の自己負担を求めた。このような風潮は、大量の発行部数をもつ二つの週刊誌（新潮と文春）などの保守的なメディアの、人質たちの私生活に関する個人的な物語の報道によって膨れ上がった。

３人は当時、イラク戦争や自衛隊の参加を支持する勢力、これに同調する世論から非難を浴び、当時の総理大臣の小泉純一郎からも批判を浴びた。また、政府内には政府の渡航延期勧告に従わなかった個人、団体の活動について「自己責任」についての議論があった。

（注）高遠菜穂子：高遠菜穂子は 4 回目にイラク訪問した最中の 2004 年 4 月 7 日に、他の日本人男性 2 名とともに、「サラヤ・ムジャヒディン」と名乗る武装勢力に監禁され、そのビデオが公開された（イラク日本人人質事件）。日本の外務省は米軍に保護を求めたが、内外からその釈放を求める動きもあった。4 月 15 日にイスラム聖職者協会のクバイシ師の交

渉により解放された。

「自己責任論」のでどころ

当時、保守系マスコミは一斉に「自己責任論」を展開した。読売新聞は社説で「自己責任の自覚を欠いた、無謀かつ無責任な行動が、政府や関係機関などに、大きな無用の負担をかけている」（4 月 13 日付）と書き、産経新聞も社説で「第一義的に自分たちの責任だ」（4 月 14 日付）と書いた。この背景には政府サイドからの働きかけがあったのではないか。政府の竹内行夫外務次官は 4 月 12 日の記者会見において「自己責任の原則」に言及した。その直後からマスコミは「自己責任」を言い出したのである。さらに、政府筋は三人とその家族の思想的背景や身元情報を意図的にリークしたと言われている。実際、３人の家族には自衛隊のイラク派兵に反対していた人もいた。

人質事件を巡る当時の世論

4 月の人質事件をうけて朝日新聞が行った世論調査によれば、自衛隊派遣継続に関しては

支持：50%

不支持 32%

であった。また、政府による撤退拒否の姿勢を 73%の国民が支持する結果ともなった。

共同通信は人質事件発覚直後の 4 月 9・10 日と、解放直後の 16・17 日の二度、世論調査を実施した。発覚直後の調査では、自衛隊撤退に応じない方針に関して

支持：43.5%

不支持：45.2%

と拮抗し、不支持がわずかに上回った。

解放直後の調査では、自衛隊撤退を政府が拒否したことについて、

「妥当だった」：61.3%

「妥当ではなかった」：8.8%

となった。

また、内閣支持率（共同通信、毎日新聞、日経新聞の調査）は各社とも、前回調査時より軒並み上昇した。政府の思惑通りの結果が出たのである。

週刊新潮のえげつなさ

新潮はよく、歯医者の待合室や床屋の待合席で見かけることがある。他の週刊誌とともに並べられているから、普段、売店では買わない人も自然と読まされてしまう。新潮の記事の特徴は「いじわる」、「悪意」、「下品」で、報道の仕方は「揶揄」、「暴露」、「ねじまげ」

である。イラク人質事件当時の週刊新潮の見出しは、高遠菜穂子の「偉大な生活」を皮肉をこめて語り、12 才でタバコ、15 才でドラッグを経験したなどと報じた。事実かどうかは分からないが、読者は信じ込まされてしまう。

こうした新潮の編集方針には確固とした考え方がある。週刊新潮の生みの親である斎藤十一氏はかつて、こう語った。以下、ブログ、「グレグレの館」からの抜粋。

「どのように聖人ぶっていても、一枚めくれば金、女・・・・・それが人間なのですよ」
「うちの基本姿勢は“俗物”主義でした。人間という存在自体がそうでしょう」
「俗物が興味をもつのは決まっています。金と女と事件」
「どのように聖人ぶっていても、一枚めくれば金、女・・・・・それが人間なのですよ。そういう“人間”を扱った週刊誌を作ろう・・・・あっさりいえばただそれだけです」（潮 1977 年 5 月）
「もちろん、ぼくらは商業です」「要するに“売らんかな”なんだよ」「人権？　たしかに大事なものかもしれないね。でも、それに拘泥していたんじゃぼくらは出版できない。人権よりももっと大事なものがある」（週刊文春 1997 年 7 月）
「相手を憎むからです。良い悪いではなく、感情のなすがままに憎む、あとの細かいことは編集部がやってくれます」（1995 年 2 月朝日新聞）

日本の誇り

高遠さんはイラク人質事件以降あまり報道されることがなくなった。しかし、新聞の投書欄には時折、氏の活動を応援する記事が載ったりすることがある。「自己責任論」が蔓延するなか、こうした投書に救われる。政府筋や三流週刊誌の記事に惑わされないようにしたい。

「戦火のイラクで人道援助活動中、人質にされ解放された高遠菜穂子さの活動を先日、テレビで見た。2004 年 4 月に高遠さんらが誘拐され命が危ぶまれた状況で、釈放を巡って時の小泉純一郎首相が「自己責任論」を唱え、高遠さんらに対するバッシングが起きた時の義憤がよみがえった。（中略）放送で彼女が心ない誹謗中傷で自殺まで考えていたこと、いまだに日本人よりイラク人と接している方が幸せに感じられることなどを知った。……高遠さんのような人がいることは日本の誇りである。今なお中東を拠点に薬品の配布や医師の紹介、生活相談などの人道援助活動を続ける姿に賛同し、私も寄付を贈りたい。」（東京、2010 年 3 月 7 日付）